



SF西遊記 -はじまりの章-

このオレの、何が特別なの？
ねえ、せんせい、教えてよ…!

著・おおぬきたつや

CONTENTS

著者のご挨拶♡

拙著をごらんいただきまことにありがとうございます！

こちらは随時に更新される不定期コンテンツ追加型ノベルスです♡

更新したおりはその旨、表紙やタイトルなどに表記しますので、そちらを参考にしていただければ幸いです♪

ちなみにみ著者はピクシブなどを拠点に活動しておりますので、そちらの自前のグループなどで交流することも可能であります♡ ピクシブアカウントなどがありましたら冷やかにでものぞいてみてください♪ キャラとお話できたり、お望みとあればオリジナルのノベルやゲームキャラのデザインなんてこともあるかもしれません♡

以下に最新のグループのアドレスをのっけますが、あくまでその時点でのデータです。他にもありますので、わからないことは筆者にお気軽におたずねください♡

[グループ・SF&ファンタジー！ ノベルでもイラストでも♪](#)

<https://www.pixiv.net/group/?id=38278>

ココナラなどのクラウドソーシングでもデザインを請け負っています！

こちらは運が良ければ無料枠でただ、ないし**500**¥からと格安です♡

[ノベル・TRPGなどオリジナルキャラデザインやります](#)

[！ https://coconala.com/services/276049](https://coconala.com/services/276049)

CONTENTS

- はじまりの章 -

- ・ シーン 1
- ・ シーン 2
- ・ シーン 3

近未来(SF)西遊記

- はじまりの章 -

シーン 1

ドオオオンッ……！！

さながら爆発でもあったかのような激しい破壊音が轟いた。

白い煙が立ち上り、目の前で怒号とかまびすしい悲鳴が交差する。

やがて悲鳴と怨嗟(えんさ)の声ばかりが鳴り響き、それらもすべてがぱったりと途絶える……！



空(むな)しく乾いた頭の中では、かつての、ある情景が思い起こされていた。

——ええ。そうよ。あなたは、特別なの……！ とても特別な、まさしく選ばれた子……！！——

——特別……このオレが？——

ただひたすらに焦(こ)がれて信頼を寄せていた人物の言葉を、その時はわけもわからずにただ聞いていた。

少年は、その真の意味も知らないまま……。

——時が来たの。そう。あなたがその特別な力と、特別な存在であることを理解する、その時が……！ だから、ねえ、このわたしの言うことを、どうかただ黙って素直に聞いてちょうだい。そして、あなたの本当の名を……！ そうよ。あなたの名は……！！——

血のおいが鼻をつく。

血まみれの動かぬ人型たちの真ん中に立って、少年はみずからの血にまみれたどす黒い手を見つめる。おびたしい返り血で赤い衣装が今はただ黒く染まっていた。

血しぶきは天井までも赤く染めていた。

空しい視線で天を見上げて、少年は乾いたのどからかすれた声をふり絞(しぼ)る。



「ねえ、せんせい……このオレは、何が特別な？ 教えてよ……！」

大きな穴が空いた壁からは、まぶしいオレンジの夕焼けがギラリと差し込む。
むせかえるような死臭と血にまみれたその身体(からだ)を焼くように照らした。
かくて物語は幕を開けた……！

シーン 2

シーン 2

そこはシン……と静まり帰った、汗臭い畳の広間だ。

学校の体育館とはまた別個の実技場、柔道や剣道の部活動の実習用にあつらえられた武道館には、今や人影がぼつんとひとつだけ、何をするでもなしにたたずんでいた。

見るからにさえない感じのくたびれた中年の男だ。

みずからが立つその場よりもむしろこの建物の外で何かしらの気配がするのにな、つとその視線を向ける。

校舎とは反対側の壁越しに低いうめきと、あらっばいドタバタとした物音がして、すぐにもぱったりと途絶える。

それにより首尾よくことが収(おさ)まったのを察する男は、口元にかすかな笑みを浮かべてうそぶくように言ってやる。

「はい、ご愁傷様♡ まずはお一人様、この身柄を確保っと……！ まったくガキってのはチョロいもんだな？ そしてそれにもまして、女ってのはつくづくコワイもんだ……ふん！」

手元に持っていた紙切れに皮肉っぽく苦めた目線を落としておいて、しまいにはそれを無造作に破り捨てるおじさんだ。

そうしてまた別の方向から来る気配に頭を巡らせた。

苦笑いのままで、またうそぶいてくれる。

「はいはい、本日二人目の犠牲者、もとい、哀れなガキんちょのご登場っと……！ それじゃこの俺もさっさとお役目済ましてバックれるとするか……」



玄関口から大きな木製の扉を開けて入ってくる人影と仁王立ちして向き合った。

相手は大柄でふとっちょだが、まだ若い学生くんであるところの背格好からわかる。

もともとよく見知った顔であることもあり、そのあまりかんばしくないような微妙な顔つきしたおデブの学生くんを茶化すような言葉を発した。

「おう、やっとのご登場か？ わざわざ部活を休みにして道場開けておいたんだから、もったいつけずにさっさとくりゃいいものを！ おかげでせんせい待ちくたびれちゃったぞ？ 大将！！」

せいぜい冷やかし混じりに言ってやるのに、やや仏頂面した相手は返す言葉もどこかとげがあった。

「大将！ じゃねえよ？ いきなり呼びつけておいて、おまけになんだよ、せんせい、学校や

めるって……！ おれぜんぜん聞いてないんだけど？ 部活の顧問がいきなりとんずらなんてねえだろうさ……！」



「ふん、だからこうして挨拶してやってるんだろうさ？ そもそもこの俺ごときがいなくなったところで他にもやるヤツはいくらだっている！ 県内でも屈指のもさぞろいの強豪柔道部だか

らな？ 泣き言は聞きたくない。文句なら構わないが、後のことなんて心配するだけ野暮ってもんだぞ、この俺も、おまえさんもな……！」

「は、なに言ってんだよ？ おれは礼を言いに来たんだからな！ これまでずっと世話になった顧問のおやじさんに！！ てかどうしてこんな急にやめちゃうんだよ？ なんかヤバいことでもやらしたのか？ さてはエロおやじにありがちな不祥事的な??」

暗い顔つきながら気丈に軽口なんか叩いてくれる。

真顔の相手に精一杯の強がりと気遣いを感じるオヤジだ。

不覚にも目頭が熱くなりかける。

だが口元の苦笑いを一層に強めて言ってやった。

現実はそのなにかいもんじゃないと……！

「はっ、それはこれからやるんだよ……！ いや、礼だなんてずいぶんとしおらしいな？ なんだって気にもしないで笑い飛ばすおまえさんが！ ならこれも笑い飛ばしてくれよ、いや、ま、無理か？ そうだな、この俺のこと、恨んでくれても構わないさ。今はこうして先生と生徒の立場だが、もし次に会うことがあれば、その時は……な！」

「?? ほんとになに言ってんだよ？ それにどうしてこんな人気(ひとけ)のないところで、おれだけ呼び出したんだ？ やめるならやめるってきちんとみんなの前でさ……」

ひょっとすれば泣き出すんじゃないかと思うくらいな沈んだ表情のぶっちょくんに、負けず劣らずデブでかい肩をすくめる顧問のオヤジはせいぜいニヒルな言い回しだ。

「そいつは無理だな！ あかの他人を巻き込んじゃうわけにはいかないだろ？ なに、おまえさんもすぐにわかるさ、こいつがお互いどうにも皮肉な巡り合わせだったってことにな。俺ははなから教師だなんて向いてなかったんだ……！」

「せんせい！！」

くるりと背中を向けるのに、背後から呼び止める教え子を振り向くことはなかった。

スッ……と、ただ軽くだけ片手を上げてやるオヤジさんだ。

あばよ……！ とばかりに渋く決めてやったつもりなのだが、その後に来たわりかし冷静な指摘にはちょっとズッコケてしまった。

「なんでそっちに行くんだよ？ 玄関こっちだぜ?? あとその土足！ 靴はいたまま道場に上がり込むなんてマナー違反だろ！！」

「あっ……！ いま気にする？ いいや、いいんだよ。俺はもう教師じゃないんだ。むしろ不審者ってもんでな？ それにマナー違反のヤツらならもうじきここにもっとたくさん……達者でな！ あばよっ、このかわいい愛弟子め。だが今日までだ、明日からおまえはかわいげなんておよそみじんもないブタのバケモノ、そうだ、猪八戒なんだからな！！」

「ちょっ……はっかい?? なんだよ、なに言ってんだよ、せんせい！！」



振り返らないと決めたはずなのに、教え子の叫びには思わず半身をさらしてしまう元教師にして部活の顧問だ。

おまけに不敵な笑みを浮かべた横顔で言うつもりもなかったセリフを口走ってしまった。それが愛すべき教え子への精一杯の餞別(せんべつ)だとばかりに.....！

「だからもう先生じゃねえんだよ、この俺はな、たった今から泣く子も黙る牛魔王(ぎゅうまおう)

さまだ...！ とどのつまりでおまえの敵だよ.....はははっ、愛してるぜっ、達者でな！！」

「なっ.....！？」

呆然と立ち尽くす教え子を後に足早に道場の外へと、裏手の山へと消えていく不審者だ。なんやかんや言いながらよくなついていた生徒が追ってくることはないのは知っていた。物騒な気配と物音が背中にまとわりつく。

「あばよ.....！」

悲鳴がしたのかも知れないが、もう二度と振り返るまいと決めていたおやじは厳しい表情で獣道をひたすら駆け上がっていった.....！

シーン 3

もう梅雨が近いのに、不意に冷たく乾いた風が吹き抜ける……！

夕方、西の空がオレンジに染まるのが良く見渡せる、とある雑居ビルの屋上だ。

そこにいつものように三人で息をひそめてその時が来るのを待つ。

タイミングは手元の端末(スマホ)が教えてくれる。

その暗い画面の中にある標的、場所、状況などの細かな指示を冷めた表情で眺める少年は、小柄なその身を血のように赤い衣装に包んでいた。

「……っ」

やがて視線を画面から上げると、何を言うでも無くてただ西の空をまぶしげに眺める。

かすかなため息をついたのかも知れない。

するとそのすぐ背後、大柄で恰幅(かっぷく)の良くした体格の全身これまたド派手な真っ黄色な衣装で包んだ大男、もとい巨漢の人間とは思えないような見てくれの何者かが口を開いた。

およそ人の言葉を解するとは思えないようなブタづらが、いかにもつまらなそうに小柄な少年の背中に問う。



「ぶふっ……どうなんだ？ 標的、この近くにいたんだろ。ならかったるいからさっさとやっちまえばいい……！」

「.....まだだよ。わかってるだろ、やるコトはいつもと変わらない、おんなじなんだから.....！」

おなじようにつまらなそうな口調で答える少年に、ブタのバケモノみたいなデブの人間もどきは顔の真ん中ででんとあぐらをかいたでかい鼻先をフンとひくつかせる。

するとその隣で、やはり気分のよさげでない何者か、こちらは長身でほっそりとした見えてくれながら、顔を見ればブタもどきと負けず劣らずの人間離れした面相の怪人が言葉を発する。

「ターゲットは向かいのビルにいるんだろ？ いつも通りの過激派だかテロリストどもだかが？ 全員殺して、はいおしまい！ なんだから、いつも通りには変わらないな.....なら、毎度毎度お決まりの考えなしのそこの馬鹿力の正面突破でいいんだな、悟空？」

「.....」

問われる少年は答えない。

心なしかその表情、口元が陰しかったか.....？

代わりにその横のデブのブタづらが、でかい肩をすくめながら擲揄(やゆ)した言葉を真横に返す。

「ぶっふ、どうやらおれらのリーダーさまはご気分がよろしくないんだと！ なにが気に入らないのかしらねえがよ？ それよかおいカッパ、考えなしの馬鹿力ってな、ひょっとしてこのおれのことか？ んなこたやる気のねえスカシに言われたくねえんだけど??」

「はっ、他に誰がいるんだよ？ このブタっ鼻！ あとちゃんと沙悟浄(さごじょう)って呼べ。俺は正直気に入ってはいないんだが、カッパ呼ばわりは御免被(ごめんこうむ)るからな？ あいにくハゲてもいなければ頭にサラも載せちゃいないんだ。お前みたいな見るからにブタづらならまだしもよ.....」

「ぶっ、ふふん！ 言ってくれるな？ このいつまでもイケメン気取りのスカシ野郎が！ 今のてめえのツラ鏡で見たことあんのか？ 女をとっかえひっかえしていたかつてのイケメンさまがどこへやら、まだこのおれのほうが愛嬌があるってもんだらうにっ.....！」

背後でにわかに殺気立つのに厳しい目線で振り返る少年だ。



「やめろよっ、もうじきカウントダウンに入るんだから！ いつも通りのフォーメーションで、

突入口を開いたら即座に任務遂行だっ……遊びはなしだぜ、せんぱい？」

「は、せんぱい？　ぶぶっ、ぷ、聞いたか、先輩だってよ！　コイツ、いつまで昔を引っ張ってるんだか、いい加減に忘れちまえてのによ！　これから血なまぐさくなるってのに、女々しいのはかんべんしてほしいぜ、なあ、リーダーさまよ？」

「たくっ…もう世間一般で言われるほどにガキの身分じゃないんだ、割り切らないと任務に差し支えるだろう？　だが言ってること一理はあるよな、おいブタっ…じゃなくて八戒、おまえやるときはこの俺から離れたところでやれよ？　でないと返り血が飛び散って衣装が汚れちまう、気分が悪いったらありやしねえ！」

「ぶん、おれはおまえたちとちがって素手のゲンコだから、血が出るのは仕方ねえだろ？　頭だろうが腹だろうが潰せばみんな血反吐(ちへど)をぶちまけるんだからよ……！」

「やめろよっ！　カウントダウンがはじまった……！！」

険しい視線を正面へと差し向ける少年に、背後のでかい人影も黙ってそちらへと向き直る。

かつてとてつもない惨劇が繰り広げられたという寂れた街の一角で、また新たなる惨劇がはじまろうとしていた。